

織物から推察する古代史

正倉院の古裂と街道
西の鯖

渡部 康子

『魏志倭人伝』に記された

卑弥呼の染織品

中国の歴史書三国史の魏書第30巻東夷伝倭人条に倭国の風俗や地理などが書かれた部分です。なかなか興味深いのですが、ここに卑弥呼が魏王に送った織物に係る記述があります。

「其の四年。倭王はまた使の大夫伊聲耆、掖邪拘等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青縑、絳衣帛布、丹、木拊短弓、矢を上献す。掖邪拘等は率善中郎将と印綬を壹拝す。」

卑弥呼が献上した布として倭錦（わきん）絳青縑（こうせいけん）、絳衣、帛布があげられています。

倭錦とはどのような布なのでしょう。か。倭錦は倭文（しどり）や倭文布（しずおりの）と言われた布で、大和朝廷が興る以前に、九州北部から南朝鮮まで広がっていた海人族の織物に端を発しているそうです。後には

中国で縦縞の織物がすべて倭文とよばれるようになったそう、その海洋民族の織物が広く流通

していたのだということが分かります。考古学では紀元前1世紀福岡市有田遺跡から銅戈に付着した平絹が見つかっています。弥生時代中期の絹織物を出土例は九州北部に限られており、織機に使う布巻き具の出土例もこれと重なっているため、養蚕や織物の技術は弥生時代後期（1世紀中頃～3世紀中頃）に北九州から全国に広がっていることがわかります。

絳青縑の絳とは赤く染めた布で、縑は緻密におった布なので、経糸に赤と青を用いて緻密に織った布ということになります。絳衣は単に綿でつくった衣か、繭でつくった真綿を埋め込んだ布かもしれません。帛布は麻布です。

時代が下がつて卑弥呼の娘壹与は魏王に「異文雜錦二十四匹」を献上しています。異なる文様の様々な絹織物です。倭文のような経縑ではなく、緯糸で複雑な文様を入れ込む緯縑（ぬきにしき）の技術が習得されていたのかもしれませんが。前1世紀に伝わった養蚕と機械織りの技術は3世紀後期弥生時代になると複雑

赤紫地唐獅子文錦（正倉院）
日本書

な文様をおることもできるようなったのでしょうか。

また5、6世紀には大和朝廷が部民制を敷き、国衙（くにが）と呼ばれる地方事務所に倭文部（しどりの）を設置します。『和名抄』

には倭文部として常陸国（ひたちのくに。茨城県）。美作国久米郡（みまさかのくに、安来市南部）伯太（博多）、上野国那波郡（かみつけのくに。群馬県高崎付近）淡路国三原郡（淡路島西南部）因播国高草郡（鳥取県鳥取市付近）。また京都の綾部など全国各地にも倭文神社があります。

ここからわかることは、倭文を織る技術をもっていた海人族は大和朝廷と密接に関わりがあり、全国各地に養蚕と絹織物の技術を伝播したということです。神社を祀ることから一族なのかもしれません。

国衙で絹織物が重視されたのは、調として納品しなければならなかっただけでなく、貨幣のかわりとして流通していたからではないでしょうか。高価で自然条件に左右されない織物は、共通の安定した価値をもち、役人の給与なども織物で支払われることもありました。

正倉院の古裂から見る東アジア史

正倉院にはたくさんさんの古裂があり、分析され、多くの研究がされています。その中で筆者が心ひかれるのは「調絶（ちようぜつ）」です。緋、黄、橡など色と収めた国が墨書で記されています。あしぎぬは荒い絹糸で織られた布で官吏の制服などに使われました。調緋絶はほとんど国衙と呼ばれる地方事務所で茜で染色されています。それに対して調庸布と呼ばれる麻布は染色せずに納められています。

正倉院には布衫（ふさん）単衣の下着があり、それが紅花で染色されていることが分かっています。写真は子ども用に仕立てたとみられ、背面の裾に「刑部小君（おさかべのおぎみ）」という人物名が墨書されています。新たに「天平十三年（741）十月」との記載も見つかりました。いったいどんな子どもであったのか想像がとびます。紅花はエジプト原産で、シルクロードを渡り、5・6世紀に日本に伝わったとされていますが、



紅花染布衫

この時代には地方で紅花で染めたものが見つかっていません。高価なもので中央でのみ使われていたのではないのでしょうか。

正倉院の宝物で羊木鴈縑屏風ひづきかりのびんぶうがあります。ろうけつ染めの技法で、樹下に

佇む羊を大きく表し樹上には2頭の猿猴が遊び、下方には山頂に樹木が小さく表された険しい山岳が表されています。巻角まきつのの羊や樹下に動物を配する構図は、ササン朝ペルシアの美術に由来するので、西域からの献上品と思いたいのですが、下端部に調絶銘ちようてつめい(ちようのあしぎぬめい)と思われる墨書ぼくしよがあり、天平勝宝三年(751)以降に日本で制作されたものだそうです。

また鳥毛立女屏風とりげりつじよのびんぶうは樹木の下に唐風の美人を置いていることから「樹下美人図」とも呼ばれますが、このように樹下に人物を描くのは、インド起源の様式だそうです。美人の姿からして、これは唐で描かれた舶来品ではないかと思いたいのですが、第五扇の下貼紙に、「天平勝宝四年」の年号の記載があるこ



羊木鴈縑屏風

とや、わずかに残存する羽毛が日本産の山鳥のものであることから、日本で描かれたものというのが定説です。

何故、あたかも西域風のを、日本でつくったのでしょうか。模倣したのならどこかに本物があるはずですが見つかりません。この謎を考えるにあたって宮内庁の正倉院のホームページにある文章が参考になります。

『さらにいまひとつの特質は、世界性です。正倉院の宝物は、国際色豊かな中国盛唐の文化を母胎とするもので、大陸から舶来した品々はもとより、国産のものもまた、その材料、技法、器形、意匠、文様などに、8世紀の主要文化圏、すなわち中国をはじめ、インド、イランからギリシャ、ローマ、そしてエジプトにもおよぶ各地の諸要素が包含されています。なかでも注目されるのは、



鳥毛立女屏風

西方的色彩の濃厚なことです。西方の要素は盛唐の文物に取り入れられ、やがて我が国に伝来して、正倉院にとどまっているのです。「正倉院はシルクロードの終着点である」という言葉は、この宝物のもつ世界性の一端を言いあらわしたものだといえるでしょう。正倉院宝物は、単に奈良朝文化の精華を示すだけでなく、実に8世紀の世界文化を代表する貴重な古文化財なのです。『西域の影響で思い当たるのはササン朝ペルシアの滅亡です。7世紀に勃興してきたイスラム勢力が築いたサラセン帝国にササン朝ペルシアは滅ばされます。イスラム教への改宗をきらった一部の勢力はインドに逃れ、そのまた一部は長安に逃れ、そのまた一部が海を渡って日本に來ます。』

波斯人はしじんと呼ばれたこの人たちは何を思つて海を越えたのでしょうか。ササン朝の再興を願つて援軍を要請しに來たのかもしれない。しかしながら6世紀百済の滅亡を助けるため大軍を出して

白村江で負けた大和政権はその要請に応じませんでした。官吏に召し抱えられたり、技術者として定住したと思われる。正倉院のある東大寺の建設責任者であった僧、実忠和尚も渡来系の人であつたと伝えられています。

これら亡命した渡来人たちがもたらしたものを奈良の工人達

が必死で吸収したのではないのでしょうか。模倣したとしたら、何故オリジナルがないのでしょうか。その謎を西陣織りの織元を経営していた方が教えてくれました。「模倣するには全部ほどこいて、糸一本一本の色、質などを解明しないといけない」のだそうです。

またもう一つの可能性としては、亡命してきたペルシャ人技術者が、日本にある材料で作ったということです。動乱の東アジアの歴史の中で逃げる果てが日本であつた。奈良という国家はそのすべてを吸収して成り立つた非常に国際色豊かな国ではなかったでしょうか。

筆者にはもう一つ解決したい謎があります。それは「亡命渡来人は日本に着いてからのルートで奈良へ向かったのか」ということです。船団をしたて、使者として華々しく来るなら、九州から瀬戸内海を渡るルートで来るでしょう。しかし、バラバラに亡命して来るなら中国南部、朝鮮南部から黒潮に乗るか、朝鮮北部から寒流のリマン海流に乗って日本に來るはず。そしてその両方がぶつかるのは若狭沖です。おそらく若狭に上陸し、そのまま真っすぐ奈良に南下したと思われる。『正倉院がシルクロードの終点』なら、若狭から奈良にいたる西の鯖街道もシルクロードかもしれません。